

( ' ; ω ' ; ) ふ あ つ

くうちゃん

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

なにこれこわいいちわきえたー

?

# 目次

1



?

キンコンカンコンコン。

授業の終わりを告げるチャイムを聞き、俺は机に伏した。

今朝の事が原因なのだろう、なんだかとても疲れていたのだ。

「おい空夜、今日俺の家で実験な！」

「いいねえ祐也君、早く見せてえ〜」

「わかったわかった。少し待ってくれ」

俺は顔をあげると、教科書をカバンに入れ帰る支度をした。

「よし、じゃあ行こっか」

3人で教室を出て、祐也の家へと向かう。

祐也の家は、学校から歩いて20分ほどの所にある。

「なあ、炎つてさあ、どんな感じだった？」

「ライターの火があるだろ？あんな感じかなあ。」

ただ、すごく安定してたな。」

「それってさあ、熱くなかったのお？」

「ああ、なんだか暖かい感じで熱いとは思わなかった。」

「ふくん、不思議だねえ〜」

そんな他愛もない話をしていると、祐也の家に着いた。

「ただいま！」

「おじやましまあ〜す」

「こんにちは、美里さん」

「あらあら、やつぱり3人とも仲がいいのねえ。」

……ところで彩香ちゃん。ウチのと空夜くん、どっちにするか決めた？」

迎えてくれたのは、祐也のお母さんの美里みさとさんだ。

「え〜、違いますよお母さん。」

どっちも違いますってえ〜」

色々とすごい会話だが、いつものことなので、俺も祐也も気にしない。

「んじや、俺達は部屋行くから。」

部屋へと向かう祐也について行き、部屋に入る。

祐也の部屋は残念なことに、特出している部分はなく。

ベツトに机、マンガがたくさん入った本棚が有るだけだ。

「よし、さっそくだが空夜、見せてくれ！」

「まあまあ、そう焦るなよ。」

ゆつくりと深呼吸をしながら、今朝の事を思い出していく。

手に浮かぶ炎。炎から伝わってくる暖かさ。

頭の中でイメージが固まる。

そして、眩く

「燃えろ」

『っ！』

2人が驚く声が聞こえた俺は、手に感じる暖かいものを感じながら、目を開ける。

「どうだ？本物の炎だろ？」

「あ、ああ。すげえ、すげえよ!!」

「わあ、キレイ……」

驚く2人を見ると、優越感を感じた俺はドヤ顔をしながら。

「これが、3年間かかさずやり続けた男の成果だ……」

すると、それを見た2人は

「せっかく綺麗な炎なのに……」

「でもでもお、凄いいし……ね？」

空夜は気づいていないが、2人はとても微妙で残念な顔をしている。

「よし、これで信じてくれるよな？」

「当たり前だろ！ 最初っから信じてたぜ」

「そーだよお、こんなに綺麗だとは思わなかったけどお」

「よかった：正直言うとな、非現実的過ぎて疑ってるかと思つてたんだ。んまあ、そんな事は置いといてだな。

もうそろそろ、炎が消えると思うんだ」

「え？ そんな事も分かるのお？」

「ああ、なんとなく。だけどな」

すると、空夜の手の上で燃えていた炎が消えた。

「あつ ほんとに消えたあ」

ふらつと 空夜が倒れそうになる。

「空夜君！」

彩香は、いつもの間延びした喋り方ではなく。

叫ぶようにしながら、空夜の肩を掴み体を支えた。

「おい、空夜大丈夫か！」

祐也も空夜の近くに行き、声をかける。

「お、おいお前ら。落ち着けて！」



言つたろ？ 疲労感を感じるって」

「そう言うと空夜は、座り直す。」

「そ、そうだけどお」

「それでも、急に倒れそうになつたら焦るだろ」

「まあ…その、すまない」

部屋の中が静けさに包まれた。

空夜は、その空気を破るように言う。

「見てもらったところで、お前らはどう思う？」